

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2011年 9月26日

派遣者氏名（専門分野）	■■■■■（芸術学）
-------------	------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	19世紀後期英国におけるデザイン教育行政に関する研究 —コール・グループを中心に—
-------	--

派遣期間

2011年 7月 23日 ～ 2011年 9月 20日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	連合王国	ロンドン	ヴィクトリア&アルバート美術館 および国立芸術図書館	クリスティン・グース博士

派遣先で実施した研究内容

本研究の目的は、ひとつめに、19世紀中葉以降のデザイン改良運動を担った、政府の文官ヘンリー・コールと仲間たち（コール・グループ）が構築したデザイン教育施策「サウス・ケンジントン体制」の概要を把握することである。二つめが、メンバー間のデザイン理論の影響関係および、理論と実践の内容を具体的に検討することである。このため、官立デザイン学校（現在の王立美術大学）の再編とサウス・ケンジントン博物館（現在のV&A美術館—すなわち同館および付設の国立芸術図書館自体が研究対象の一部を成している）創設に関わる基礎的な調査を文献の閲覧・精査によって行った。

今回参照できたのは、コールらが所属した「実用美術局」および後継の「科学・芸術省」による主に1850年代の公文書とメンバーの著述が中心であった。建築家/デザイナーのオーウェン・ジョーンズの講演『On the true and the false in the decorative arts』（本書によって、彼の理論形成の過程のみならず、メンバーのM・D・ワイアットおよび以下のレッドグレイヴの理論との影響関係が判明した）および『Lectures on the articles in the Museum of the Department』と、同省芸術総監督のリチャード・レッドグレイヴによるテキスト『An elementary manual of colour with a catechism』等は、膨大な情報量が掲載されている同局・同省の『年次報告書』や『博物館カタログ』とは別に、彼らの具体的な教育論・実践を知るうえで参考になった。さらに『Addresses of the superintendents of the Department of practical art』と、レッドグレイヴによる『On the necessity of principles in teaching design』には、彼らのデザイン教育観が簡潔に記されており、これらが教育方針の把握に役立つことが分かった。

なお資料収集の際には、先行研究に加え、デザイン・カウンシルが刊行した『A Bibliography of Design in Britain, 1851-1970』、クライヴ・アシュウィン編『Art Education documents and policies 1768-1975』を概ね参考にした。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

1837年に創設された官立デザイン学校が、1851年の大博覧会を一つの契機として再編され、サウス・ケンジントン体制が敷かれるにあたり、それが①どのような要請のもとで行われ、②教育方針の変化と実態ついて、コールとレッドグレイヴによる記述を調べることによって、新たに理解することができた。实用美術局の設置によって、デザインの高等教育の改革のみならず、初等教育への参入・博物館の設置といった大幅な変化と体制構築があったわけだが、それらの情報は前掲の公刊物に詳細に記載されていることを確認できた。また、ロイヤル・アカデミーにおける教育との比較が、本研究を充実させるためには必要であることもわかった。これらの情報の整理が終わり次第、記述を行う過程に入る。

また、同機関が設置される以前の、1840年代における官立デザイン学校のテキスト、W・ダイスによる『The Drawing Book of the Government School of Design』を実見でき、同書が後のサウス・ケンジントンのデッサン教育にいかに関与を与えたかについて貴重な示唆を得ることができた。コール達が、初期における官立デザイン学校の達成できなかった課題をどのように捉え、教育体制に築こうとしたかについても、上述の調査によって、納得することができた。この、従来の官立デザイン学校との連続性と非連続性の詳細については、収集した資料をこれから丹念に読み込んで、まとめていく。

計画当初は、同機関の教育施策の根底を成す『Principles of Decorative Art』（实用美術局編）の成立過程と、メンバーの理論の影響関係を明らかにできると考えたが、その分析にはさらに時間がかかることに途中で気づいた。同省の公文書の記述には、グループの誰が立案したのかを示す言及はなく、デザイン原理の形成プロセスを明らかにしようとするならば、メンバーの各記述を時間軸に沿って読みこなさないと解明できない。しかし、コール（特に未読了の『Fifty years of public work...accounted for in his deeds, speeches and writings』）、ジョーンズとレッドグレイヴ他の諸著述をそれぞれ比較考察するには、時間が足りなかった。したがって、本研究の二つ目の目的については、滞在中の解明が叶わなかったため、今後の課題としてじっくり取り組みたい。

加えて、コール・グループのメンバー個々の「アート／デザイン概念」に対する各所見についてもより精緻な分析をして、上記の議論につなげていきたい。今回の調査で、彼らが design より、decorative art という用語を多用するのは、「装飾が建築から生じる」という共通の信条に基づいていたゆえのことと確信するに至った。関連して、用語「design」への推移・20世紀への展望について、補完的調査を続ける。最後に、発展的な議論として、サウス・ケンジントンで行われたコール・グループのデザイン教育が、西欧諸国のみならず明治期の日本にも影響を与えた事実が指摘されている。これを検討するためにも、本研究を基盤にして、さらに継続的な調査に努める。

派遣後の研究発表の予定

今年度の学内研究誌『フィロカリア』に、本研究で得た成果を踏まえ、論文発表する予定である。あるいは、意匠学会で口頭発表した論文に、本調査の概要を踏まえ、加筆し投稿することも検討している。

また、来年度の派遣予定の「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」における研究にも一部関連するため、英国での国際ワークショップの口頭発表に、本調査の内容が反映される。